

デカルト哲学と現代

清 水 明

デカルト哲学は現代において如何なる意味を持つのか、もとより浅学の身である私には過重な問いである。しかし、デカルト哲学に限らず古典を研究するものにとって絶えず念頭に置いておかねばならない類の問いでもある。また、この種の問いに対する解答を試みることほど私にとって格好の自己批判の機縁はない。このような機会を与えられた会員諸氏に対してあらためて感謝したい。

この問いはデカルト哲学の全体像の把握ばかりか、現代についての透徹した理解をも要求している。現代の理解には、政治的、経済的、社会的な側面からする構造的で且つ歴史的な考察が必要であろう。しかし、無論のこと、私にはそのような知識も能力もない。従って、私のこれから述べることは現代の哲学的側面からする考察に限られる。しかしその際、現代の哲学的側面からする考察ということでは如何なるものが考えられているか、必ずしも明らかではない。そこでまずその点から考察を始めることにする。

現代の哲学的側面からする考察ということではまず考えられるのは、ヨーロッパ近代の思想史を紐解き（その思想史は、必ずしも哲学史には限らず、政治思想史、社会思想史、科学思想史、倫理思想史、宗教思想史、等々でもあるが）、その流れをたどり、現代の思想的状況および思想的課題にまで説き及ぶことである。しかし私は、それはごく一部にとどめたい。というのも、私はその様な考察が必ずしもただちに哲学的考察になるとは思わないからである。それは私が哲学史を紐解いた場合でも同じ

である。

歴史を無視すると言っているのではない。私達が何かを学ぶことがあるとしたら、それは歴史からでしかないであろう。しかし、その学び方が問題である。少なくとも現在をよく知ろうという点から言えば、歴史の流れを追うという仕方では歴史を見ることが得るものは少ないのではないかと、言いたいのである。歴史の流れを追うという仕方では歴史を見れば、当然次の時代を作り上げるのに効力のあるものの連続として歴史を見ることが出来る。次の時代を作り上げるのには至らなかった試み、人々の関心が別のところにあったために気付かれないままになってしまった課題、そういったものがやもすれば抜け落ちてしまう。ところが、現在私達が行っている試みのうちでどれが次の時代を作り上げて行くことになるのか、私達に課せられている問題のうちどれが次の時代にも引き継がれて行くのか、私達にはまだ分からない。しかしそれらすべてが現代を構成している。そうであれば、過去の時代にも、歴史に残る企てや次の時代に引き継がれた課題の他に、多くの企てや課題があったに違いない、そしてそれら全てが過去のある時代を構成していたのである。

私が言おうとしていることは、いわゆる裏側の歴史を重要視せよということとは少し違う。裏側の歴史と普通言われているのは、社会の裏側で連綿として続いているオカルト的な秘密結社の歴史とか、弾圧され歴史から抹殺された反体制運動の歴史、歴史上の事件としては表に出てこない人々の生活様式等の変遷などといったものであろう。勿論それらも重要だが、それらは、何れも次の時代を作り上げるのに何等かの形で効力のあったもの、従って、現代を作り上げるのにも効力のあったものの歴史である。それに対して、私が問題にしようとしていることは、現代を作り上げるのに効力の無かったもの、或は効力があつたにしても具体的な形を取らないものである。従って、ほとんど記録に残りにくいもの、例えばある人がふとある未来の社会を空想する、しかし空想した本人でさえ余りに馬鹿げ

ているので、すぐさまくだらないものとして捨て去ってしまう、そのような空想、そしてそのような空想を生み出してはまた吸収してゆくその時代の一般的雰囲気、さらには、實際次の時代を作り上げるのに効力のあった企てのなかに当事者達には気付かれなかった隠れた意味、などである。そして問題は、そうしたことをただ集めることではなく、どうしてそれらのものが捨て去られたり、気付かれないうまになってしまったか、という点にある。それらが捨て去られるようにさせたもの、それらに対して人々を盲目にさせていたもの、それらもまた、その時代の重要な要素であったはずである。

歴史には必ずその様な要素があると私は思う。私は歴史家ではないので適切な例を挙げる事が出来るかどうか分らないが、しいて何か挙げるとすれば次のようなことである。

原子爆弾の開発に従事した物理学者に、今日の核時代は予想できなかったであろうと思われる。つまり、原子爆弾が当時のどんな爆弾より遙かに威力のあるものだということは分かっていても、その威力に対する恐怖の下に日々の生活を過ごさねばならない時代がくるとは予想もしなかったであろう。勿論、戦争を終らせるために原爆を使わねばならないということ、これ以上無益な人殺しをしないために人を殺さねばならないということに矛盾を感じていた人はいたに違いない。原爆の開発という行為の道徳的意味について考えた人は当時でもいたであろうし、その後気付いた人もいると思われる。しかし、その行為がその後の世界を如何なるものに作り上げて行くかについて、それは彼らの予想を越えていた。科学技術のもたらした成果に人々がおびえつつ暮らす世界がくるとは予想しなかったであろう。

しかしながら、科学技術のもたらす成果に人々がおびえつつ暮らす世界を当時の人々が全く夢想だにし得なかったということは言えない。それは、フランケンシュタインの物語が証明している。人体の各部が死体から集められ、それをつなぎ合わせて作り上げられた人造人間が人間を襲うこの物語は、

正に科学技術のもたらす成果に人々がおびえつつ暮らす話である。フランケンシュタインの物語は既に一八一八年に出ている。従って、記録には残っていないものの、原爆の開発者の中の誰かが今日の核時代を、ある日ある時ふと夢想したということも有り得るのである。

以上が、記録に残らない夢想の例、及び、己の成した行為の隠れた意味を見落とす例である。隠れた意味とは言え、その意味は元々そこにあったわけではなく、その後の世界の歴史の進展につれて生じてくる意味なのであるから、原理的に予想することは難しく、しかし、かといって全く不可能とも言いきれないものである。過去のいつの時代でもその時代にとっては現代であり、まだ意味の定まらない地帯があった。それがその後の歴史の進行によって次第に形が整い意味が定まって来たのである。従って、ある過去の時代のその時の全体と、後の時代からみた全体とは当然異なったものである。しかし問題は、こうした記録に残りがたいもの、行為に含まれる僅かな意味生成の可能性に、私達がどのようにしたら気付くことが出来るようになるか、という点にある。

こうした問題に答えるためには、単に時代の流れを追うという仕方では不十分であるが、個々に細分化された分野の歴史を見るだけではなおさら不十分であることは、言うまでもない。政治的諸制度や経済的諸制度、その他諸々の社会的諸制度は互いに絡み合っている。各々を単独で取り出してもさして意味はない。更にそうした社会的諸制度を支えているのは人間である。従って、人間の考え方が変われば社会的諸制度も変わる。しかし、人間の方も社会的諸制度の中で生活しているのであるから、人間の考え方が社会的諸制度によって影響を受ける。人間の意識が社会を変えるのか、社会が人間の意識を規定するのか、という二者択一は問題を過度に単純化するだけの不毛な思考法であらう。従って問題は、それらがどの様に絡み合っているか、という点にある。

この問題について私が有力な考え方を持っているわけではない。少なくとも、いまのところ私はデ

カルト哲学からそれを学びとってはいいない。むしろ私はそれをデカルト哲学から学び得るものかどうかを疑っている。

デカルト哲学が現代を全体的に理解する方法を教えてくれないと言っても、デカルト哲学を研究する意味が無くなってしまうのではない。逆に、現代の世界を形成してきた多くの諸制度、そしてそれらを支えてきた考え方は、ヨーロッパ近世にその源を発しており、そしてヨーロッパ近世の思想の枠組みを最も良く表現しているのがデカルト哲学である。そうであれば、この問題を根本から考え直すには、デカルト哲学まで遡って反省するのが結局のところ一番近道である。

＊

＊

＊

現代を形成するのに最も影響のあったものは、なんと言っても科学技術の発展であろう。科学技術の発展により、エネルギー革命が何度か起こり、生産力が飛躍的に高まり、経済機構を変え、政治機構を変えてきた。無論、経済機構、政治機構の变革には、人々の意識の変化も相前後して起こり、その人びとの意識の変化もまた、社会的諸制度の変化による所が大きい。科学技術そのものの発展も、その経済的基盤や、政治的社会的情勢に左右されるのであるから、科学技術の発展が全ての原因だと言いうこともできない。

科学技術の発展は、生産力を高めるだけではない。科学上の発見の多くが直接私達の思想や行動に影響を及ぼすこともある。科学ということ、単に自然科学だけではなく社会科学や人文諸科学も含めれば、その影響はもっと顕著なものになるだろう。今日の社会科学や人文諸科学は、私達の思想と行動それ自身について、個人の経験だけでは到底知り得ないことを教えてくれている。それらの知見

が逆に私達の思想と行動に与える影響もまた大きいのである。

デカルトの生きた時代は自然科学が生まれかけていた時代、しかしそれを応用すべき技術の方は今だ未発達で、機械と呼べるものといえばゼンマイで動く時計ぐらいのものだった時代である。社会科学はいまだ無く、人文諸科学も学問としてはまだ成立していない。神学と哲学だけが学問と呼ばれ、あとはすべて技術と呼ばれていた。勿論、産業革命以前で、フランスの社会はいわゆるアンシャンレジームである。とは言っても、ルネッサンスや宗教改革を経験し、中世的秩序が崩壊しかけている、戦乱に満ちた時代でもあった。こうした時代にあつて、デカルトは中世的思想の全面的改革を行なった人、従つて、近代の思想の基本的な枠組みを提示した人と、一般には評価されている。ただ彼は神学には手をつけなかった。彼が行なつたのは、哲学の大改革である。とは言つても、その哲学の中には、今日で言う自然科学、当時の言い方では自然学全体が含まれていた。彼自身が自然科学者でもあった。学問全体の改革ということで彼が手掛けたものの、それは自然学を含めた意味での哲学の改革である。しかしここに、先に、デカルト哲学は現代を理解する方法を教えてくれない一つの原因がある。現代に於て知の領域のかなりの部分を占めるものが、デカルトの時代には無かったか、あるいはデカルトによつて知の領域にあるとはみなされなかったという、さしあたって単純な理由である。しかしこの点をもう少しよく見てみることにしよう。

デカルトが学問という時それは技術から切り離されたものであった。学問は専ら精神の認識のみによつて成り立ち、技術は身体の活動や素質を必要とするという点で全く異なる種類のものだ、というのがデカルトの考えである。少なくともデカルトの初期の作品である『精神指導の規則』にはそう書いてある。学問と技術の区別はデカルト哲学の主要なテーゼである精神と身体の区別に基づけられていることになる。しかし、デカルトの当時はともかく、現代では、科学と技術とは、そう簡単に切り

離せるものではなくなっている。コンピュータの技術者、原子力発電所の技術者は、それぞれ電子工学、各種プログラム言語、原子物理学等々を学ばなければならない。決して、身体を動かす修練を積むことによって技術者になるのではない。逆に、様々な学問分野で、各々の研究技術というものがある。実験装置の扱い方、フィールドワークの方法などは各人が体で覚える必要がある。勿論ここで、各技術者、各学問研究者一人一人の中で、精神による認識の部分と身体の修練の部分を分けられるはずだ、と言うことはできる。各人の中にいわば技術者と学問研究者が分離しつつ同居していると考えるのである。しかし、技術を習得する際に認識は必要であり、認識を獲得するためには技術が必要である。各技術者、各学問研究者の日々の作業の中で、どこまでが認識に関わる活動で、どこまでが身体の修練であるか、はつきり分けることは事実上不可能である。従ってもし学問と技術が分けられるとすれば、それは各々の本性の原理的な違いを示すことによつてのみである。デカルトはそれを精神と身体の区別ということで行つたことになる。

もっともデカルト後期の作品『哲学原理』の序文では、学問の体系が一本の本になぞらえられ、根が形而上学、幹が自然学、そして幹からそれらの学問の成果たる果実が実るべき3本の枝がでており、それらは道徳、医学、機械学となっている。これら3本の枝は技術的要素が多分にあるものである。道徳が技術だというと驚く人がいると思われるが、道徳は、デカルトにとつて、幸福な人生を送るための技術と言つても良いものを意味している。この点を考えると、デカルトは、はたして晩年に至るまで学問と技術を峻別していたかどうか疑問になる。しかし、学問と技術の区別が精神と身体の区別に基づけられている限り、デカルト哲学の建前としては、両者は厳しく区別されるべきものと考えなければならぬ。

この様に、デカルト哲学は普通は切り離しがたいものをきっぱりと分ける二分法に満ちた哲学であ

る。デカルトの言い分は、本来原理的に区別されるべきものがしばしば混同されるところから、様々な誤解が発生する、というものである。これは一般的には私達にとっても全く正しい考え方である。しかし問題は、デカルトが主張し、そしてその後のヨーロッパ近世の思想に受け継がれた多くの区別が、本当に本来原理的に区別されるべきものであったかどうかである。精神と身体の区別をその根底にして、いま言った学問と技術との区別、理論と実践、認識と行動、という互いに関連した区別がある。動物と人間の間には越えがたいみぞがあるという考えも、人間には精神があり、動物にはないからだと説明されるであろう。

デカルトによれば精神と身体とはそれぞれ全く異なる種類の実体である。精神が一個の独立した実体であるという考え方からは、個人と社会、私と他人、という区別乃至は対立が生まれる。社会は単なる個人の集合となる。従って、社会の中で主体と呼べるものは個々の人間である。この点は後に市民革命を起こす思想的源流ともなるであろう。しかし、デカルト本人は市民革命の理論家ではなかった。個人と社会を区別して捉えれば、社会の中にある制度や慣習は個人にとって外的なものとなり、個人の能力をしばしば越えるものである。そしてデカルトにとって、その際のあつれきは個人にとって堪え忍ばなければならない運命と考えられた。

この点をデカルトの道徳説に沿ってもう少し詳しくみることにしよう。デカルトの道徳説と言っても、テキストはそう多く残っていない。デカルトが晩年専ら研究していたのは医学だといわれている。つまり彼の学問体系における3本の枝のうちの一本である。しかし彼は彼の医学体系を完成することなく死んだ。そして、残る二つの枝、道徳と機械学は殆ど手がつけられていなかった。しかし道徳に関しては、学問体系と呼べるものはないにしても、いくつかのテキストを残している。それは大きく分けて二つある。一つは比較的初期の作品『方法序説』の中で述べられた「暫定的道徳」と呼ばれる

もの、もう一つは彼の晩年、とは言え、それほど年寄りになってからではないが（四十代後半）、エリザベート王女への手紙の中に述べられた考えである。

「暫定的道徳」と言うのは、デカルトは「方法的懷疑」と呼ばれる、かなり徹底した懷疑によって哲学を開始しようとするのだが、その様な懷疑の中にあっても日々の生活は常に判断を迫るので、さしあたって学問体系が出来上がるまでの、暫定的なものとして定められた、デカルト個人用の道徳的格率である。それは3つの格率からなっており、およそ次のようなものである。

- ① 宗教の教えを守ること、それ以外のいっさいの事に関しては、極端を避け、人々の間で最も聡明で最も穏健な人の意見に従い、国の法律と慣習に服従すること。
- ② 平素の行動では志を堅くして迷わないようにすること、一旦決めたことは多少疑わしくなっても最後までやり遂げること。
- ③ 運命に、よりは自分に打ち勝とうとすること、世界の秩序よりはむしろ自分の欲望を変えるよう努めること。

これらは倫理学説とはいえない難い単なる生活信条である。しかしこれらはデカルト哲学のある側面を良く表しており、また「暫定的」という提出の仕方が変わっているところから、注目に値する。この道徳は一見すると、①は判断を他人に委ね、且つ、保守的なもの、②では一転して、頑固さのみ主体性を発揮するかのようなもの、③は旧態依然としたストア的禁欲主義である。しかしデカルトの説明を読むと、少し事情が違ふ。例えば、①での避けるべき極端のなかには「我々の自由を少しでも削り取る約束」というのが入っている。つまり、事情が変われば態度を変える自由を確保しているのであ

る。また、法律について、それは意志の弱い人の気が変わるのを防ぐためにあるような言い方をしている。つまり、デカルトには一旦決心したら法律の助けを借りずともその決心を変えない自信があるのである。すると、①は他人に判断を委ねるかのように見えて、実は絶えずデカルト自身の確固とした決断がなければ守ることの出来ない格率である。そもそも、最も聡明で最も穩健な人物を人々の間から選り出すのはデカルト自身の判断なのである。その判断の為にはそれらの人々の意見を知らねばならず、またその意見を吟味せねばならない。①から読み取れるのは、現在の社会が最善で、その社会の流れのままに生きて行こうといったものではなく、むしろ社会の動きから超然とした孤高の精神である。

この様に、デカルトの対社会的態度は、和して同ぜず、というものである。社会に対してそれほど働きかけもしない代わりに、世の中の動きには決して振り回されたくない、という態度である。彼が生涯大学教授の職はおろか如何なる公の仕事にもたずさわらなかったのは、そうした職につくことによつて生じる様々な義務に自分を縛り付けたくなかったからであらう。しかし、いかに社会から超然としても、またいかに世間から隠れようとしても、いやおうなく身に降り掛かることが起る。するとその場合は、それを運命として甘受せねばならない、というのがデカルトの考えである。そしてそのような場合でも精神の平安、精神の喜びを保つためには、むしろ己の欲望を変えねばならないと言うのである。

こうした「暫定的道德」に対して、先の3本の木の枝の一つとして述べられた道德は、デカルトによつて「最高且つ完全な道德」と呼ばれ、デカルト研究者からは「決定的道德」と呼ばれているものである。この道德は、「他の学問の欠けるところのない知識を前提」し、「知恵の最高の段階」とされているので、デカルトはこれをただ将来の計画として述べていると考えられる。デカルトは道德を完

成していなかったとも言える。しかし他方、『情念論』やエリザベート王女への手紙では、彼は情念を理性によって制御し精神の幸福をうる技術を述べている。そこで、それを決定的道徳として、少なくともその一部として、考えることができる。但し、そう考えるところの幸福を得る技術としての道徳は、かえって暫定的道徳の中に組み込まれてしまう恐れがある。と言うのも、幸福を得る為の方策は暫定的道徳の三番目の格率、己の欲望を変える事に他ならないからである。しかし、事態はもっと複雑である。

エリザベート王女への手紙の中でもかつての暫定的道徳は放棄されていない。彼は、暫定的道徳の「あの3つの規則に相通じるもの」として次のものを挙げている。

- ① 各人は常に出来るだけ有効にその精神を活用し、人生の如何なる出来事に際しても何をし、何を成すべきでないかについて、心得ているよう努めること。
- ② いったん理性が勧告した事柄は、情念や欲望の力によってわき道にそれることなく、すべて必ずやり遂げようという堅固不拔の決心を抱くこと。
- ③ このようにしてできるだけ、理性に従って行動する一方、自分のものでない財宝は、どれもすべて完全に自分の力の圏外にあると見なし、かつその様な方法によって、それらをけっして欲しがらない習慣をつけること。

②と③はそれほど変わっていない。②には、決心を変えることになりやすい要因に情念や欲望を指摘している。③では暫定的道徳で言っていた「運命」や「世界の秩序」が自分の力の圏外にあるものという言い方をされている。変わったのは①である。もはや、宗教、他人の意見、国の法律や習慣につ

いては触れられていない。ただ、何をし何を成すべきでないかよく精神を活用すること、となっている。先に、暫定的道德の第一の格率を守るには、實際はデカルト本人の選択と決断が必要であると言っておいたが、エリザベート王女への手紙ではそのことが全面に出されている。勿論デカルトは、宗教、他人の意見、国の法律や習慣を無視していいと考えているのではない。別の手紙ではそれらに十分配慮すべきことを説く。変わった事、或は新たに付け加えられたことは、これらの3つの格率の位置付けである。手紙の中でデカルトがこれらの格率を思い起こさせるとき、それらは、「各人が、他から何物も期待することなく、自らの手によって自足しうるため」の3つの規則と呼ばれている。つまり、これらの新しい格率は、すべて個人の精神的満足をうるためのものになっている。幸福をうる技術が暫定的道德の中に組み込まれるのではなく、逆に、暫定的道德が幸福をうる技術の中に組み込まれるのである。暫定的道德は公共向けの書物の中で述べられ、この改訂版はエリザベート王女への私信の中で述べられたというものを割り引いても（と言うのは、この手紙でデカルトはエリザベート王女の不幸な境遇に同情し、運命から見放されたような人にとっても幸福をうる方法があると説明しているからであるが）、これは単に慰めの言葉ではなく、デカルト自身の考えだと思われる。

エリザベート王女への手紙全体を通じて伺われるデカルトの道德は、エゴイズムと言ってよいほどの個人道德である。勿論この①の「何をなし、何をなすべきでないか」という箇所では、各人がめざさなければならぬ「善」が考えられている。そして人生の目的を「最高善」と言い、その最高善を所有することによって「至福」、即ち最高の満足感が得られるとデカルトは言う。つまり彼は、最高善と至福とを区別し、人生の目的は最高の満足感ではなく最高の善であるとする。しかしそこで言われる「善」をデカルトはあまり説明していない。いくつかの箇所は、善とは各個人が持つことの出来る様々な完全性、言い替えれば「徳」のようなものと受け取れる。もしそうだとすると、「何々をな

すべきである」といっても、それは他人に対してではなく、自己自身の完全性を目指す場合になすべきこととなる。また、自分一人の利益より公全体の利益になるように行為することをすすめたり、自分自身の為に善を確保するより他人に善をなす方が気高いとも言っているが、しかしこれもよく読むと、結局そうする方が精神の満足はより大きなものになる、というところに重点があるように思われる。他人や社会に配慮するものの結局は自分の精神の完全性を得るのが人生の目標であり、それを得ることによって至福も得られるというのである。

さらにこうしたエゴイズムを正当化する議論まである。それは一つには、他人や社会の事に関しては自分の力の圏外にあるということ、従って責任を持たなければならぬのは自己の思考についてだけである、という議論である。こうした考えを支えているのは、私達は個人個人切り離されており、社会とはそうした個人個人の集まりにすぎないという考えであり、個人個人が切り離されているということには更に、精神が独立した実体だという彼の形而上学がある。「独立した」ということはどういうことであろうか、それは精神がその本質に於て自由意志であるということである。これこそデカルトが彼の哲学の中で絶対に譲ることはない枢軸である。この意志があの方法的懐疑に於て懐疑に溺れることなくそれを遂行し、またその自由意志の完成こそが彼の哲学の最終目的でもあるからである。

近代はデカルトの見いだしたエゴをモデルとした主体概念を受け入れた。少なくとも、民主主義の理念は、社会は各個人個人の主体的で自由な判断のもとに成り立ち、そして全ての人間がそのような個人の資格を持つところにある。現実には各個人はその理念が要求するほど主体的でも自由でもないが。

私はデカルトの、近代主体主義の権化としての側面を強調し過ぎたかも知れない。デカルトにはそれ以外の側面がある。その側面とは、自由意志の完成がデカルト哲学の最終目標であるが、その自由

意志の完成とは、常に正しい判断を下すことにあるという点である。そして、デカルトによれば、正しい判断は、ただ知性がもたらす知識の範囲内でのみ自由意志を行使して判断を下すところにある。デカルトの主意主義は主知主義と結び付いているといっても良い。この故に、決定的道徳は学問体系の完成を前提しているのである。

彼の主知主義は、確かに学問の大転換をもたらした。自然は理性のみによって理解しうる事を示したことは、自然科学を大いに前進させた。物体の本性はただ延長のみであるということ、そしてその延長という性質は、彼が最も理性的な学問だと考えていた幾何学によってあますところなくとらえられるとされた。もはや自然界には、なんら超自然的、超理性的なものはない。自然界は法則によって支配されており、勿論その法則の全てが知られているわけではないが、人間の理性で知り得ない法則は原理的ではないのである。ところで自然界にはなんら超自然的なものはないという点は、自然界を考えるのに、もはや神の意図を推し量る必要はないということである。いわゆる目的論的自然観が排され、機械論的自然観を打ち立てることになる。神の意図を推し量る必要もなく自然の諸現象が説明できるなら、実際自然の運行に神は何ら関与していないのではないか、こうした疑問が生じてくるのは当然である。機械論的自然観は無神論と結び付き易い。実際、デカルトは反対派によって無神論だとの非難を受けた。しかし彼は無神論者ではなかった。彼は自然界の基本的な運動法則を、神の完全性の一つから導いている。また、それ以上に、全てのものの存在を、精神の存在も含めて、神に基づけている。従って、自然はすべて機械論的な諸法則に従って運行するのだが、それはまた同時に、神の定めた秩序でもある。

自然界が神の定めた秩序だとしても、やはり、その神の意図を推し量ることなく自然研究を行ってよいとなると、自然科学者にとっては、神は非常に影の薄いものとならざるを得ない。存在の根拠な

どというものに関心があるのは哲学者だけで、自然科学者はそんなものに興味がない。自然の基本的運動法則にしても、それがどういう根拠を持つかということよりも、その法則ではたして自然現象が首尾良く理解できるかどうか、自然科学者の関心を引く。デカルトの自然学は彼の形而上学から切り離され、一旦は多くの科学者に受け入れられるが、その後多くの誤りを指摘され、科学史上では過去のものとなって行く。

デカルトの自然学上の説の多くが否定されることはなったが、しかし、基本的な考え方が変えられたわけではない。例えば、自然研究に数学を用いること、自然の合理的秩序に対する信仰、こうした点は受け継がれて行く。自然に秩序があると考えることは、それが神の定めた秩序であると考えようと、そうでなかりくと、信仰には違いない。デカルトと現代の違いは、信仰を意識しているかいか、或は、その信仰に名前を与えているかいないかの違いである。

さて、以上、デカルト哲学の二つの側面を見てきたが、これは彼の精神と物体を分ける哲学での話である。この両面とも現代に大きく影響したものである。ところがデカルト哲学には更に心身結合を認める立場が含まれている。実体的には全く異なる精神と身体（物体）が実は緊密な結合をしており、それが人間の全体を成しているのだとデカルトは言う。この心身結合は常識的には受け入れ易い考え方であろう。しかしデカルトの実体の哲学にとつては大変な難問を生じることになった。というのは、実体というのはその変化においては、ただそれが持っている属性が変化するのみで、決して他の実体になることはないからである。そして、デカルトによれば、精神の属性はただ思考することだけであり、他方物体の属性はただ延長することだけである。言い替えば、精神が変化することということは、単にその精神が別の事を思考することだけにほかならず、物体が変化するとはその物体の延長的性質、例えば大きさとか空間的な位置、が変わることにほかならない。さてそうすると、

精神が物体に働きかけたり、物体が精神に働きかけるといふことはどうして起こりうるものであろうか。精神が別の事を考えるといふことと、物体の延長的性質の変化との間には、何等本質的關係は見いだせないのである。勿論兩者の間に、何等かの關係を考えること、たとえば因果關係を考えることは、因果關係の概念を然るべく規定すれば、できないことはない。しかしどうしてその様な關係が成立するのか、その根拠はまったくないのである。精神にも物体にもその様な根拠はない。精神と物体とが全く異なった実体であることが心身結合に困難をもたらす点は、普通言われてゐるように兩者が全く關係できなくなってしまうと言うよりむしろ、兩者の間の關係が全く外的な關係になってしまうと言う方が適切である。

兩者に因果關係を考える場合を例に取ろう。デカルト本人がとつた立場でもある。身体に何か変化が起こり、その変化が腦のある一部まで到達する。そしてそれが原因で精神に何か変化が起きる。さて、身体の変化が腦の一部まで伝えられる過程は物的な過程であり、それを因果關係だと考えることができる。次に、腦のある一部の状態と精神のある状態とを、時間的前後關係、恒常性、その他の条件によつて、因果關係にあると判定することもできる。この条件自身問題があるが、今は問題にしない。問題は、この二つの因果關係は同じ資格を持つ因果關係であるか、という点にある。因果關係であると判定する条件を同じにすることによつて、同じ意味で因果關係を考えているつもりになるかも知れない。しかし、兩者には、決定的な違いがある。それは、身体以外の物体と身体、及び、身体内部での諸々の因果關係には、それらを説明する物理的、化学的、生理学的法則があり、それら諸法則はいずれも物体の本性を根拠とするのに対し、腦の一部のある状態と精神のある状態とを対応させる法則などというものは無いという点である。勿論そこに経験的な法則を考えることはできる。しかし、その法則はいかなる根拠も持たない。ある領域の腦細胞が興奮していることが、どうして喜び

と対応し、むしろ悲しみではないのか、私達には、ただそうになっている、そうなるのが自然である、としか答えようがない。それは、私達が、その理由を知らないからではない。そもそも、私達が、そこにはそのような理由がないようなものとして、精神と物体を考えている、ということなのである。これが、精神と物体とがなんら本質的な関係はない、或は、精神と物体との関係は外的である、そこには根拠がない、という意味である。

ところで、デカルトはどうしたかというと、その根拠に神を持ってきた。その根拠が精神にも物体にもないならば、それは、精神と物体その双方を創造し、またその存在に関してたえず維持している神にある外はない。神こそが、心身の結合の仕方を設定したのである。デカルトは、心身結合の概念は、極めて本源的なものであって、その概念を他の概念で説明することは出来ない類のものだと、エリザベート王女への手紙で言っている。そして、その概念は知性によってよりはむしろ感覚によって、彼の言葉では、「ただ日常の生活と日頃の人との交わりを通じて、しかも、思索や想像力を必要とする事柄の勉強を差し控えることによって」、はじめて理解できるようになるものである。デカルトにとって、心身結合は、合理的秩序のうちにはない。しかしそれは非合理的だということではなく、むしろ合理的秩序がその上に築き上げられるべき私達の素朴な確信のうちにある。

デカルトは世界を合理的なものと考えた。そしてその合理的秩序を支えるものを神に求めた。さて、この様に言くと、それでは中世と変わらないのではないか、西欧的な神の信仰の伝統のない私達日本人、或は信仰を失った現代人には関係ない、等と思われるかもしれないが、それは間違いである。先ず、合理性そのものが中世と違う。また、現代とも違う。従って、それを神と呼ぶかどうかは別として、私達にとっての合理性を支えるものを探求することは、私達の課題である。宙に浮いた合理性ほど危なく恐ろしいものはない。デカルト哲学で注目すべき点は、合理性をあくまで追求しながら、し

かもそれは自足する体系ではなく体系の外にあるものとの関係で初めて体系でありうることを、彼がよく知っていた点にある。ところで彼の追求した合理性は、専ら自然の合理性と言ってよいものである。確かに彼の望んだものは「生活に有用な明晰で確実な認識」であった。そしてそれを獲得するためには、単に自然をよく知るだけではなく、生活上の事柄についてもよく知らなければならぬ。そして、実際、エリザベート王女への手紙の中でも、土地の習俗や法律についてよく知っておくべきだと言っている。しかし、デカルトは、生活上の事柄の場面で必ずしも合理性を追求したとは言えないのである。これは、彼の学問の体系の中に、私達の持つ社会科学や人文科学にあたるものが含まれていないことから分かる。どうして彼はその様に考えたのであろうか、それは、人間が介在するところでは、それら人間の自由意志が存在するからである。しかも、各々の人がその自由意志を常に正しく用いているとは限らないからである。意志が自由だと言うことは意志が従う法則はないということである。また、常にすべての人が理性によって判断しているならば、人びとの行動も予測のつくものとなるのだが、そうではないからである。しかし、このことは、デカルトが、人間が介在する世界を不合理なものと考えていたということではない。ただ合理的な接近を拒む世界とみていただけである。

人間が介在する世界と言っても、それはデカルトが合理性を追求した自然的世界と別のところにあるわけではない。人間の身体も物体であり、自然の一部である。ただしそれに精神が結合している。心身が結合しているといっても、そのために自然の法則が破れるわけではない。心身結合を因果関係と考えたとしても、身体以外の物体と身体との、及び身体内部の物質的な過程の因果関係は、脳の一部のある状態と精神のある状態との因果関係によって影響はされない。しかしこれは分かりにくい考えである。と言うのも、そこでは、実際には性格が異なる二つの因果関係が、混同され、連続するものと考えられてしまうからである。そこで、物体が精神に影響を及ぼす場合はよいとしても、精神が

物体に影響を及ぼす場合、自然界の秩序を乱していることになるのではないか、という問題が生じてしまった。特に、この場合、精神は自由意志であるので、また、自然の秩序はそのまま神の摂理でもあったので、自由意志は神の摂理と衝突するのではないか、という問題として、エリザベート王女への手紙でも問題にされることになった。

エリザベート王女に対するデカルトの返答を見ると、大変興味深いものがある。それは、後の予定調和の思想を思わせる考え方を示している点である。彼は次のように言う。「神は、各人をこの世に送り出す以前から、その意志がいかなる傾きをとるであろうか、すべてたなごころをさすように御存知でありました。実はそのような傾向を我々の中に与えたものこそ神自身にほかならないからで、また、我々の外にある他のすべてのものについて申せば、自由意志による決定にしたがって我々がいかなるものに向かおうと、神は先刻御承知になっておられますので、これこれの刻限に各人の感覚に現れてくるように、それらを案配なさるのでございます。しかし神は、その様にお望みになりましたものの、だからといってそれを我々の自由意志に、無理強いしようとはなさいませんでした。」

つまり、私達がどんなに自由に振舞おうと、それはとくに神の知るところであり、それを見越して神は秩序を建てた、というのである。しかし、この考えは十分説得力のあるものだろうか。このデカルトの言葉の中で注目すべき点が二つある。一つは、神は私達の自由意志の中に傾向を与えたという点、第二は、しかしその傾向は決して強制ではないという点である。第一の点からは、傾向を与えられるということは、はたして真に自由と言えるのかという疑問を生じる。第二の点では、強制ではないということは、人間にはその傾向に逆らって事を成すほどの自由があるということになるのか、もしそうだとすれば、神の与えた傾向に逆らう場合には神の秩序が乱れてしまうのではないか、という疑問が生じる。しかし、今はこの問題には深入りせず、ただ次の点を指摘するにとどめる。先

ず、自由についてのここでの考え方は『省察』の第四部に述べられた考え方と同様のものであり、どちらを選ぶべきかの根拠がない非決定の自由よりむしろ、何等かの傾向によりそちらを選ぶというのが真の自由であるという考え方である。次に、人間が神から与えられた傾向に逆らうと言う場合は、それに気付いてそうするのではなく、それに気付かないからそうするのであり、事柄を十分吟味せずに即断するから気付かないのである。思慮深い精神であるなら、決してその傾向から外れることはなく、それ故また、正しく判断しない者にこそ罪と罰がある。こうしたところがデカルトの考えだろうと思われる。しかし、この考えは、正しい自由意志と神の摂理とが調和することを説明するが、自由意志の間違った使用によって神の秩序が破れてしまうことまでは防止できないのではないかと私は思う。

ただしデカルトには、自由意志の間違った使用による神の秩序の乱れはたいしたことはないという論点があるように思われる。それは、悪は不完全性であり欠如であると言うとき彼が考えていたことであると思われる。もつとも、これも弁神論にとっての論点であり、たいしたことはなくとも乱れがあるなら、神の秩序を自然法則と置き換えて考えるならば、大変なことである。人間の自由意志によって自然法則が破れてしまうというのは大変なことである。

デカルトが神の秩序を人間の自由意志によってそう簡単に破れてしまうほど脆いものだと考えなかったことは確かである。彼はこの問題を道徳の問題と絡めて、次のように述べる。「じっさい神は、事物の秩序をしっかりとちたて、人々とともにきわめて緊密なきずなで結びつけておりますので、各人がすべてを自分の利のために計り、他人に対してすこしも慈愛など施さなくても、とりわけ道徳の腐敗墮落していない時代に生きているときは、賢慮を持って行ないさえするなら、自分の力の及ぶ限りのすべての事柄において、そのまますなわち他人の為に尽力している結果になるのでございます。」

デカルトが自己の満足を追い求める技術をもって道徳の問題はことたれりと考えたのも、また、自己の力を越える運命を甘受できるのも、みな、この神の秩序の堅固さに対する信仰に支えられていたと言える。ただ、いま引用した箇所では、神が人々を極めて緊密な結びつきにつけている、という所である。彼の哲学からすれば、各個人個人はばらばらのはずである。これはどういうことであろうか。

別の箇所では、個人はいわゆる通常の意味での身体とは別の身体の一部でもある、という言い方も出てくる。そこで言われている身体とは、おそらく、国、社会、家族、といったものを指している。勿論ここで個人がその一部になっているのは *corps* に身体という訳語を当てるのは危険ではあるが、というのは *corps* は単に「人の集団」、「団体」という軽い意味でも使われるからだ、そしてデカルトもその様な意味で使っているには違いないが、しかしそれでもなお、そこでデカルトは個人を個人としてのみの主体として見てはいず、むしろ、より大きな主体の一部としてみていることは確かである。それは彼が次のように言う時明らかである。「それを自分の義務と信じて、死の危険を冒したり、或は他人に幸福をもたらそうとして、死に代わるなんらかの不幸に耐えているとき、自分がこれを行うのは、自分一人で生きているのではなく、むしろ自分が属している公共に多くを負っているからだということをおそらく深くは考えていないにしても、やはりその人の頭の中には、ほんやりとその様な意識が働いているため、それが行為となって表れてくるのでございます。そして神を、そのあるべき姿において認識し、かつ愛するなら、人はおのずからその様な考えを抱くようになります。と申しますのもこのようなとき、我々は完全に神の意志に身をゆだねてしまいますので、自己の利害を捨て去り、神の御心になうと信ずる事柄をなす以外、如何なる情念も湧かなくなるからでございます。」個人の立場からは、各個人個人は独立しており、社会も外的なものとなるのだが、

この様に、神の秩序のうちにあるものとして考えれば、各個人は緊密に結合し、各個人の意識も共同体のうちにとけ込んでいる。もっとも、デカルトの場合、共同体のうちにある場合の意識も、個人の利害をはなれて神の御心を知るといふ、あくまで個人の立場から眺めた意識の叙述構造になっている。しかしそれにも関わらず、自然の研究からまったく排除された神の意向がここでは重要な要因になっていることは注目に値する。神の意向が自然研究の場合に排除されたのは、それが認識に関わる場面だったからだ、ここでは行動が問題であるということも考える必要がある。自分の行為が神の御心にならうと信ずる場合、その神の意向がどういふ具体的内容であるかは問題にされない。それは人間の知性には計り知れないことである。従って、意志に与えられた傾向も、それがどの様なところへ自分を導くことになるのか知性には計り知れないことである。ただそれが、私達を善へと導くという信仰があるのみである。

個人にとって知り得ず、しかしその個人を左右しているもの、それを現代の私達は無意識と呼んでいる。私達の行動の多くは無意識の影響を受けている。私達が自らの思考ばかりでなく、自らの行動についても責任を持ちうる存在であるためには、デカルトのエゴをモデルにした主体概念では不十分である。主体概念の改造には、その無意識の存在を許すような改造をする必要がある。デカルト哲学には無意識の概念が位置する余地はない。しかし、私達が無意識と呼んでいるものは位置を占めている。私達の無意識という概念は、通常さしあたっては意識されない、というものであり、決して原理的に接近を拒むものを言っていない。デカルトはそれを知り得ないものと考え得るであらう。それは神の御心であるからである。従って、知りうるものと知り得ないものとの境界の問題をデカルトとは違った風に考える必要がある。それは、デカルトの知の概念を改めて問題にすることにつながる。身体と精神との結合の仕方は彼にとって知性の範囲外であった。しかし、そこにある一定の秩序がある

ことは確かである。個人と個人との結合の仕方もデカルトにとっては知性の範囲外である。しかしそこにある一定の秩序があることは確かである。それは、デカルトも、神の定めた秩序と呼んでいるほどである。そこには、知り得るものなら人間でも知りたいものがある。私達は既に『そのいくつかを知りつつある。しかしその知を正当な知識として位置づける哲学をまだ十分確立してはいないのである。』

(付記 本稿は、昭和六十一年九月二十日の講演原稿をもとに、文体の変更と若干の削除・訂正をほどこしてなったものである。なお、デカルトの手紙からの引用は竹田篤司氏の訳(『デカルト著作集3』白水社)を使わせて頂いた。)